

# JFM だより

Vol.08

Winter 2013

今号の表紙

## 徳島県立中央病院

融資の実(今号の表紙)	P1
がんばる公営競技	P5
自治体ファイナンスよもやま話	P7
地方支援ダイアリー	P9
基金運用ひと口メモ	P11
「JFM」って何?	P13
人事交流日記	P14
私たちもJFM債買ってます	P15
JFMからのお知らせ	P15

地方の、地方による、地方のための



地方公共団体金融機構  
Japan Finance Organization for Municipalities





僕が融資した  
事例を  
紹介するよ!

# 改築とともに機能も一新。“強くて優しい” 徳島県立中央病院。

今号の表紙



新時代に対応した県の基幹病院になるために進めてきた改築工事を終え、平成24年10月から新たな施設での診療を始めた徳島県立中央病院。建物が一新されただけでなく病院としての機能や体制も見直し、「強くて優しい病院」をビジョンに未来に向けた挑戦を始めています。







## 「総合メディカルゾーン」として大学病院との連携を強化



徳島県には中央、三好、海部の三つの県立病院がありますが、その中でも基幹病院として重要な役割を担っているのが徳島県立中央病院です。しかし以前の施設は昭和48年に建てられたもので老朽化が進み、徳島県では10年ほど前から建て替えを検討してきました。そして経営状況の改善など条件が整ってきたことから平成21年に改築工事に着手し、24年6月に竣工、同年10月から新病院での診療を始めました。



県立中央病院は、徳島大学病院に隣接しているという全国でも珍しい立地環境にあり、今回の建て替えを機に一帯を「総合メディカルゾーン」とする構想を推進。中央病院は救急、精神、がん、周産期・小児、災害の五つの領域に重点を置き、大学病院はより高度な医療や医療技術の開発・評価を担うという役割分担を明確にしました。そして両病院の連携を密にすることで、徳島県の医療・教育の向上や活性化を目指しています。二つの病院を結ぶ長さ約67メートルの連絡橋がその象徴となっており、スタッフの行き来や、緊急手術などでの患者さんの搬送に活用されています。





## 新たに掲げたビジョンは「強くて優しい病院」

「強くて優しい病院」。新施設・新体制で再出発した県立中央病院は、これを今後のビジョンに定めました。また新たな運営方針としたのが、入院・手術中心の病院経営へと移行し、外来は紹介患者を主体にしてフリーアクセスは救急に絞ること。このビジョンや運営方針について、平成17年の着任以来、経営改革や病院の改築に尽力してきた永井雅巳院長に説明を加えていただきました。

「強く」というのは、近隣の医療機関からの患者さんの受け入れ依頼を断らない頼もしさを備えると同時に、救急にも強い病院になることを意味しています。また“優しい”には、患者さんやご家族、地域の医療機関はもちろん、当院のスタッフにも優しい病院でありたいという意味を込めました。これは決して内輪向けの甘いメッセージではなく、スタッフの満足度を高めることは、提供する医療の質の向上や健全経営に確実に結びつきます。私はそれを、これまで経営改革に取り組む中で確認してきました。

運営方針については、健全経営の継続や、県立の基幹病院としての使命を全うするために定めました。当院が目指す急性期病院では1日当たりの新規入院患者数が重要になりますが、救急と紹介に力を入れることで安定経営の目安となる1日31人の維持を目指します。紹介を広げるためには地域の医療機関から信頼を得ることが欠かせないため、私もこれまで各医療機関との“顔の見える関係づくり”に努めてきました」



### 基本設計時の予想図



徳島大学病院東病棟

徳島大学病院中央診療棟

徳島大学病院外来棟(予定)

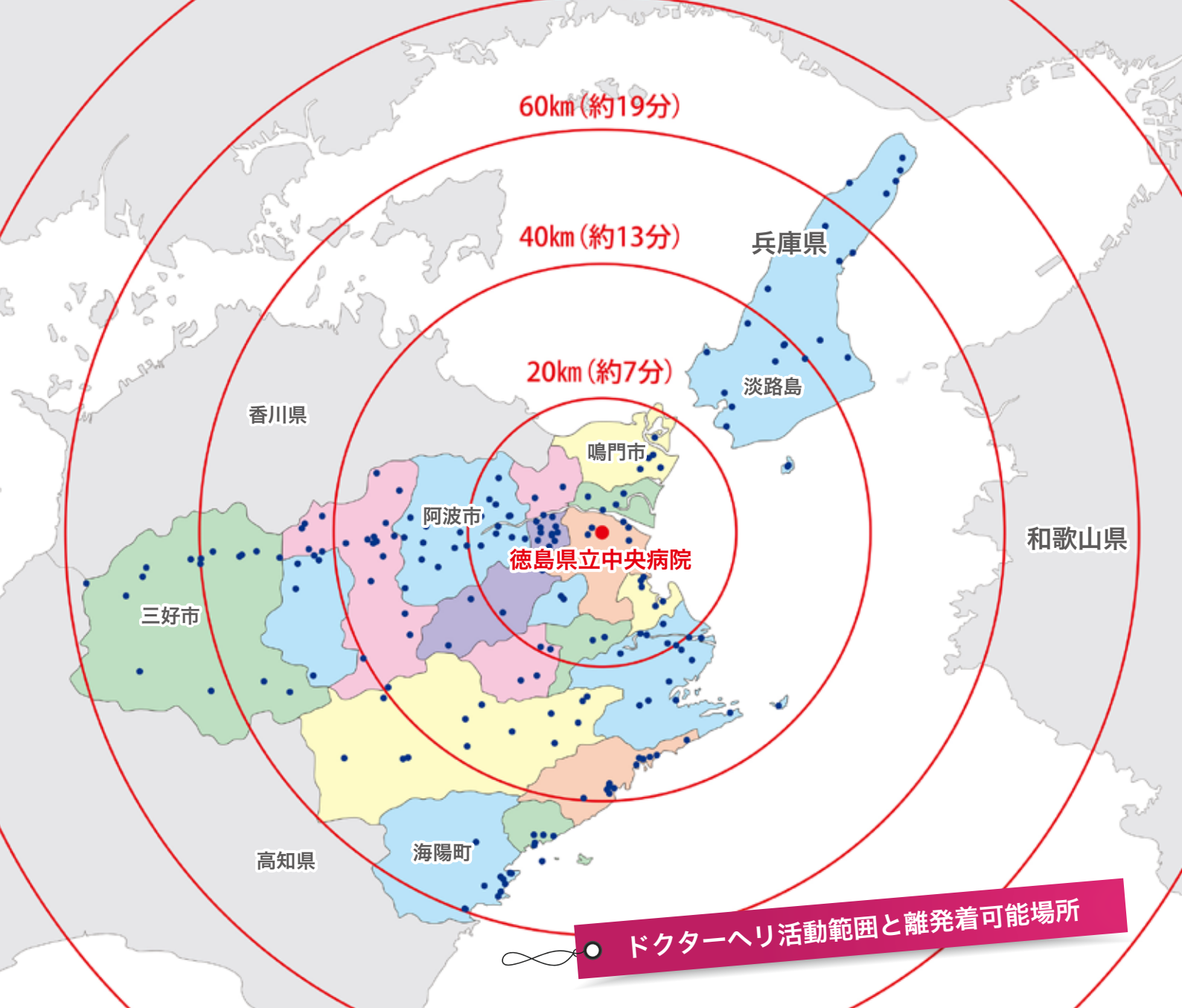
連絡橋

立体駐車場(徳島大学病院)

メディカルストリート(仮称)

県立中央病院

総合メディカルゾーン構成図



## 全体の医療レベル向上につながる「教育病院」

免震構造の地上9階建て、全460床という規模になった新病院では、救命救急体制の強化のため新たにドクターヘリを導入し、屋上にヘリポートも設けました。このドクターヘリが、山間部の集落で緊急対応が必要になったときに医師を派遣したり、県の西部や南部などからの患者さんの搬送で力を発揮し、地域による医療サービス格差の緩和に寄与しています。

「新しい病院で診療を始めてからの1年で、新規入院患者数などの数値的な目標はほぼ達成しました。だからこそ今後の課題としては、将来的な医療の向上にも結びつく“教育”にあると私は考えています。新病院になってから研修医も増えましたが、より多くの研修医を育てることが教育だとは思っていません。研修医を受け入れることで、教える側の知識や意識も変わります。そうして病院全体の医療の質が高まるのが“教育病院”の真の意義だと考えています」(永井院長)

救命救急医療への注力は、医師の士気をもつながっているとのこと。どんな患者さんが運ばれてくるか予想もつかない救急対応は医師にとっても怖さが伴いますが、様々な専門領域の当直医が常時5、6人控える環境であれば、医療技術や経験を培うための魅力的な現場になります。それもあって新病院は、若い医師や研修医にぜひ働きたいと希望される病院になりました。真新しい施設だけでなくその中身も、徳島県立中央病院は確実に進化を遂げています。

